

令和5年度 生活科部会研究計画

1 研究主題

ふるさとを愛し、豊かな生活を創り出す子供の育成
—身近な生活に根ざした体験活動を通して—

2 研究主題について

(1) 主題設定の理由

低学年の児童は、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶ等の具体的な活動や体験を通して学ぶという特徴がある。生活科はこのような児童の発達特性を考慮し、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目標とする。

本部会では、令和2年度より主題「ふるさとを愛し、豊かな生活を創り出す子供の育成」、副主題「身近な生活に根ざした体験活動を通して」を掲げ、研究に取り組んできた。新型コロナウイルス感染症に対する状況の変化に合わせて、児童の学びを止めないように指導計画を改善したり、ICT機器の活用等、学習活動を工夫したりする中で、改めて、生活科学習における具体的な体験活動の重要性が認識された。身近な生活に根ざした体験活動は、将来に向けての原体験となり、児童の資質・能力を育むことや地域に愛着をもち生き生きと生活できる児童を育むことにつながる。教師は、取り上げる学習材が目の前の児童の思いや願いに沿ったものであるか、地域の特性が十分生かされたものであるか、他者との関わりがより深まるものであるか等を検討し、児童の身近な生活に根ざした体験活動をさらに充実させる必要がある。

本部会が目指す、このような学びの在り方は、令和3年中央教育審議会答申で示された『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～にもつながるものである。そこで、今年度も主題を「ふるさとを愛し、豊かな生活を創り出す子供の育成」、副主題を「身近な生活に根ざした体験活動を通して」とし、一人一人の学びに着目し、児童に豊かな生活を創り出していく力を育んでいきたい。

(2) 主題についての考え方

本主題では「ふるさと」を児童の生活圏にある、身近な人々、社会及び自然などの環境、学習の対象や場のことと捉える。「豊かな生活」とは、「自分の成長とともに周囲との関わりやその多様性が増したり、一つ一つの関わりが深まったりすること、そして自分自身や身近な人々、社会及び自然が一層大切な存在になって、日々の生活が楽しく充実したり、夢や希望が膨らんだりする」¹生活である。

「ふるさとを愛し、豊かな生活を創り出す子供」は、次のような姿であると考えている。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① ふるさとや自分のよさに気づき、対象と適切に関わることができる子供② 自分自身や身近な生活について考え、自分なりに表現することができる子供③ 自ら対象に働きかけ、よりよい生活を創り出そうとする子供 |
|---|

① ふるさとや自分のよさに気付き、対象と適切に関わることができる子供

児童は、毎日の生活の中で、はじめからふるさとや自分のよさに気付いているとは限らない。対象に体全体で繰り返し関わることで、「やってみたい」「知りたい」「できるようになりたい」という思いや願いをもって主体的に関わるようになる。そして、友達と共に学ぶ中で、満足感や達成感を味わい、友達や自分のよさに気付いていく。いろいろな人・もの・ことと関わりながら活動していくことで、ふるさととのよさや自分とふるさととの関わりが具体的に見えてくるとともに、ふるさとが自分にとって大切な存在となっていく。このように、気付きの質が高まっていく過程で、生活上必要な習慣や技能が身に付き、対象に対する関わり方が洗練され、児童が自立し生活を豊かにしていくことにつながる。

② 自分自身や身近な生活について考え、自分なりに表現することができる子供

思いや願いの実現に向け、活動や体験に没頭することにより得た発見や成功は、表現の意欲となる。それらを言葉・絵・動作などの多様な方法によって伝え合い、振り返ることで、無自覚な気付きが自覚化されたり一つ一つの気付きが関連付けられたりする。また、表現した結果から、新たな思いや願いが生まれ、次の活動へと向かっていく。このように思考と表現が一体的に行われたり繰り返されたりすることで、気付きの質が高まり、対象が意味付けられたり価値付けられたりする。そして、ふるさとと自分との関わりが深まることで、児童の生活圏にある全ての人やものが一層大切な存在になり、心豊かに生活していくことができるようになる。

③ 自ら対象に働きかけ、よりよい生活を創り出そうとする子供

自ら対象に働きかける中で、「どんぐりごまの回し方を、幼稚園の子に上手に教えてあげられるようになって、うれしかったよ」と自分自身の成長に気付く。また、「毎日わたしが水をあげたから、アサガオの花がたくさん咲いたよ」といった手応えを感じるようになる。この時に味わった、満足感や達成感が一人一人の自信や意欲になる。また、遊びを創り出したり多様な人々と関わったりするといった経験をもとに、児童は、遊びや生活は自分たちの手でよりよく創りかえることができると気付く。そして、「町探検でいろいろな人とお話できたから、前よりたくさんあいさつしよう」「友達がやっているお手伝いをぼくも家でやってみよう」と学びを実生活に生かしたり新たなことに挑戦しようと試みたりして、自分たちの生活を豊かにしていこうとする。

3 研究内容

(1) 豊かな学びをつくるカリキュラム・マネジメント

① 地域の特性を生かした指導計画の作成

- 児童、学校、地域の実態を適切に把握する。
- 地域の素材を見直し、価値ある学習材を教材化する。
- 生活科マップや人材マップ、生活科暦などを作成し、適宜見直す。
- 指導計画の実施状況を評価してその改善を図る。
- 学校内外の協力体制を整える。
 - ・全校的な協力体制を整える。
 - ・保護者や地域の人々、公共施設や関係機関の人々の協力が継続的に得られる体制を整える。

② 意図的・計画的な年間指導計画の作成

- 2学年間を見通した年間指導計画を作成する。
- 児童の実態，9項目の内容や11の具体的な視点を考慮する。
- 単元と単元とのつながりや関係を意識する。(季節，ストーリー性)
- 校外での活動を積極的に取り入れるとともに，活動や体験に合わせて授業時数を適切に割り振る。
- 他教科等との合科的・関連的な指導の充実を図る。
- 児童の思考の流れを大切にして計画し，実際の児童の姿に応じて柔軟に改善していく。

③ 学びの連続性の保障

- 「幼児小の架け橋プログラム」²の推進を図る。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm
 - ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解や実践面での活用を進める。
 - ・幼児期の教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムを編成し，学校全体で取り組む。
 - ・幼児期からの学びや育ちを生かし，分かりやすく学びやすい環境づくりを心がける。
 - ・互いの教育内容や方法への理解を深め，幼稚園・認定こども園・保育所等と連携する。
 - ・幼児と児童の交流が互恵的，継続的，計画的に行えるようにする。
- 低学年の2年間におけるつながりを工夫する。
 - ・2学年間の中で具体的な活動や体験が拡充されるように考慮する。
- 社会科や理科，総合的な学習の時間など中学年以降の各教科等への接続を図る。
 - ・育成を目指す資質・能力や見方・考え方のつながりに留意する。

(2) 気付きの質を高める学習活動

① 身近な生活に根ざした体験活動

- 対象に直接関わる具体的な活動や体験を重視する。
- 児童の発達段階に応じた体験や地域の特性を生かした体験を重視する。
- 試行錯誤や，繰り返し対象に関わる活動を設定する。

② 伝え合い学び合う表現活動

- 児童の多様な気付きを生かす。
- 児童の発達段階を考慮し，多様な表現方法を工夫する。
- 振り返ったり，交流したりする場を工夫する。
- 対象への気付きとともに自分自身についての気付きが深まるように支援する。

③ 思いや願いを実現していく学習活動

- 対象に思いや願いをもつことができるように，児童と対象との出会わせ方を工夫する。
- 児童がじっくりと活動にひたることができるようにする。
- 自己選択・自己決定の場を大切にする。
- 見付ける・比べる・たとえる・試す・見通す・工夫するなどの多様な学習活動を行う。
- 身近な生活に関わる見方・考え方を生かしながら，さらなる活動に広げたり深めたりできるようにする。

- 効果を適切に判断し，ICT機器を活用する。

(3) 確かな学びを育む学習評価

① 育てたい資質・能力の明確化

- 学習過程の中で、「知識及び技能の基礎」の習得，「思考力，判断力，表現力等の基礎」の育成，「学びに向かう力，人間性等」の涵養の三つが偏りなく実現されるようにする。
- 評価規準を具体的な児童の姿で設定する。
 - ・単元に即して，質的に高まった姿を想定する。

② 長期的・共感的・多面的な評価

- 結果だけでなく，活動や体験そのもの，結果に至るまでの過程を評価する。
- 1単位時間だけでなく単元全体を通しての児童の変容や成長を適切に評価する。
- 他教科等や授業時間外の児童の変容にも目を向ける。
- 多様な児童の姿を共感的に理解し，意味付け，価値付ける。
- 多様な方法を関連付け，多面的に評価する。
 - ・見取り表等を工夫し活用する。
 - ・行動やつぶやき，発表，表現物等を関連付ける。
 - ・自己評価や相互評価，複数の指導者や協力者での見取りを適宜取り入れる。

③ 評価・改善による指導の充実

- 評価を生かして，児童に寄り添った適切な支援を行う。
 - ・児童のよさを伸ばすような言葉かけを工夫する。
- 共感的な児童理解の力を日々の授業を通して高める。
- 単元計画や年間指導計画について評価・改善し，今後に生かす。
(学習活動や学習対象の選定，学習環境の構成，配当時数等)

4 研究の進め方

(1) 研究大会において

- 本年度は研究主題及び副主題の解明に向け，郡市研究会を経て，三好市立池田小学校において研究成果を発表する。

(2) 各郡市部会において

- 研究主題及び副主題の解明に向けて，授業研究会及び研修会を行う。
- 各種研究会や研修会に自主的に参加するとともに，各郡市で取り組んだ研究内容の共有化を図る。

(3) 各校において

- 地域の特性を生かしたカリキュラム・マネジメントに努める。
- 身近な生活に根ざした体験活動を充実させる。

1 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活科編」平成30年2月 pp. 11-12

2 文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」令和4年3月31日